

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1791500109		
法人名	株式会社楓の家コーポレーション		
事業所名	グループほーむ楓の家リゾート		
所在地	石川県羽咋郡志賀町安部屋戊18番14		
自己評価作成日	令和2年11月12日	評価結果市町村受理日	令和3年1月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <http://www.kaigokensaku.jp/>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	(有)エイ・ワイ・エイ研究所		
所在地	金沢市無量寺5丁目45-2 サンライズⅢ106号		
訪問調査日	令和2年11月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

今年度はコロナ禍の中「大切な人の命を守る」事を第一と考え面会制限を実施し、感染源を施設内に持ち込まない事、スタンダードプリコーションの徹底に努めて参りました。開設以来のメイン行事である納涼祭もやむなく中止の決断をし、運営推進会議も書面にての報告に変え、ご利用者様、ご家族様、地域の皆様にご理解とご協力をお願いして参りました。変わりないのは「自立と共生」の理念の下、利用者様の生活の場を守り、生活の質の担保を優先したサービスを提供する事です。日々、思考錯誤しながら常に利用者様と共に過ごす日常が大切と考

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは「自立と共生」という理念を掲げ、入居者との絆を大切に、入居者の思いに沿った支援に職員全員で取り組んでいる。入居者の智慧を活かして、梅干しやゆかり、かんぴょう、ヨモギ茶、干し柿、かぶら寿司など、入居者から教わりながら一緒に作ることで、入居者の楽しみや活力となっている。看取りは行っていないが、町のチャンネルの「人生会議」を利用して終末期の在り方を話し合っている。また、今年度はコロナで活動が出来ていないが、地域との関係は大変良好であり、納涼祭の開催や運動会、フリーマーケット、オレンジカフェ等への参加等、積極的な交流活動を行っている。近隣住民からのお花や野菜の差し入れも多く、日常的な交流が年々深まっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
60	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の	67	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
61	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある	68	今日		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある			<input type="radio"/>	3. たまに
			4. ほとんどない			<input type="radio"/>	4. ほとんどない
62	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が	69	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くない
63	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:40,41)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が	70	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
64	利用者は、戸外の行きたいところへ出かかっている (参考項目:53)		1. ほぼ全ての利用者が	71	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が
		<input type="radio"/>	2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
65	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が	72	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
66	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「自立と共生」の理念を職員は理解することに努め、実際の介護サービスに活かしている。	管理者は職員会議において、「自立と共生」という理念について、職員に理念の大切さを伝えている。自分たちの介護は、入居者との関わりの中から、蓄積された経験を活かし、介護するのではなく、入居者の人生と一緒に伴奏していくことであり、家族にはなれないが、家族に近い存在になれるよう支援することだと説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度は、コロナウィルス感染拡大防止のためあまり出来ていない。	地域を巻き込んで納涼祭など、地域との交流を推進している。また、フリーマーケットやオレンジカフェなどに出かけていくことも多い。また、季節の野菜や切り花を持ってきてくれる人もあり、地域との関係は良好である。今年度はコロナのため出来ていない。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度はコロナウィルス感染拡大防止の為あまり出来ていない。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度は、コロナウィルス感染拡大防止の為書面のみの報告としている。	現在、集うことはせず、書面会議を行っている。、区長や民生委員、警察官、家族の方々へ現在の状況や入居者の日頃の様子を報告し、情報共有を行っている。	ホームからの報告だけではなく、メンバーから意見を求める工夫をされることを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナウィルス感染拡大に配慮し、メールや電話で対応している	メールや電話で町担当者との連携は保たれており、必要時には相談できる協力関係は築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	楓の家グループ全体で取り組んでおり、隔月で「身体拘束廃止適正化委員会」を開催し各事業所に持ち帰り報告検討している。又「身体拘束廃止推進委員養成研修」に毎年職員が参加している。	身体拘束は絶対にしないという信念のもと、「待つ」「座って」というNGワードは使わず、どのようにしたら不適切ケアにならないかを常に話し合っている。内部研修を行い、職員の身体拘束についての意識向上を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	Ngワードを職員間で検討し掲示している。職員ひとりひとりの心掛けが大切と話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている		感染への配慮のため、面会が減っているが、『楓だより』で発信する写真が家族から喜ばれている。施設に来られた家族には本人の様子を伝え、家族の希望を聞く機会としている。遠方で電話をかけてこられる家族には、日頃の様子を伝え、要望等を聞いている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	記名する事を旨とし意見箱の設置をしている。管理者は、日々の申し送りや職員会議の意見を代表者に伝えている。	職員用の意見箱があり、直接社長に意見が届くシステムになっている。職員は気軽に意見、アイデア等を言える関係である。シフトの希望、備品の購入、感染についてなど職員の意見は毎月の会議で検討するようにしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	整備している。 コロナ禍の中6月には全職員に「生活支援金」を支給し、物資の不足時には、サージカルマスク、消毒液等施設使用以外にも支給した。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度は、コロナウィルス感染拡大防止の為、個別の指導を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度はコロナウィルス感染拡大防止のため県や市町村の要請に従い参加している。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	「3S」を実践し、安全・安心なサービスを速やかに行えるよう職員が協力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	特に重要と考え取り組んでいる。 傾聴に努め早期の信頼関係の構築を目指している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日々の生活は待たず無しで進行しており、適確な判断が出来るよう心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「自立と共生」の理念の下、伴走的支援を念頭に共有する時間を大切と考えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍中でも、関係性が途切れないように、電話の取次ぎやガラス越しの面会をサポートしている。ほ一むより「楓便り1回/月」を発信し個々の写真や、お知らせなどを載せている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今年度はコロナウィルス感染拡大防止により実施していない。	馴染みの人間関係が継続できるように支援しているが、今年度はコロナのため、行うことができていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	常に心がけている。 一人ひとりの個性を尊重し良好な関係性を築くお手伝いをしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	コロナ禍の中自粛している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のサービスの中から会話を多く持つことを心掛け、「きずき」を持つようチームで取り組んでいる。	入居者との「きずき」を大切にしようとしている。職員は入居者に寄り添い、何気ない会話の中からその方の思いや意向を把握しようと取り組んでいる。自分から話しができない方には、表情、仕草から思いをくみ取るようにしている。把握した入居者の思い等は記録に残している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケア会議やサマリの回覧等を実施し職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別支援を旨とし、日々の申し送りを丁寧に行い職員が共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	作成している。	入居者本人の思いを受け止め、そこから受け止めたニーズや要望を具体的にプランに起こしている。モニタリングは定期的に行っている。状態の変化に応じて随時行うこともあり、プランに反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	努力している。 「」を用いて利用者様の発信している事を記録し、サービスの向上につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	柔軟なサービス提供を心掛けてきたが、今年度は、コロナウィルス感染拡大防止を優先しているため、不本意である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年度は、コロナウィルス感染拡大防止のため出来ていないが、地域の資源は把握している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	コロナ禍のなかでも、志賀クリニック、富来病院は、電話相談や問い合わせに応じて下さり、症状によっては連携して対応してくれている。	9名中、家族同行での受診は一人であり、その他の方は訪問診療を利用している。外来の専門科受診もあり、家族同行を基本とするが職員同行で対応することもある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	「報告・連絡・相談」を徹底し、症状により早期の受診に繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	介護サマリ・看護サマリを相互に提供し、情報共有を計っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	人生会議の開催を視野に入れて取り組んでいる。	看取りに関しては現時点では行っていない。そのため、病状の進行や急な状態変化が起こった時、入居者自身がどうしてほしいのかを考えるよう、町からも推奨されている人生会議(ACP)を行っている。多くの人は特養や介護医療院への申し込みをされている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ホーム内研修で、看護師より指導を受け学んでいる。 又、救急要請の手順や必要書類の準備などを指導している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	緊急時の対応マニュアルを常日頃から学習する事を要請している。緊急時はそれに従い対応することになっている。	緊急時に職員が適切に対応できるよう、職員会議や内部研修などで職員のスキルアップを図っている。緊急時のマニュアルは完備されており、職員が見やすい場所に掲示している。	
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	確保されている。	地域の医療機関による支援体制を整えており、介護老人福祉施設とは契約もされている。また併設のケアホームや同法人全体の連携・バックアップ体制も確保されている。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	夜間帯は、隣接する小規模多機能に夜勤者1名、当直1名がおり応援に駆け付ける体制になっている。	夜間は1名が配置となっているが、併設のケアホームの夜勤者、オンコール待機者による応援体制もあり、管理者や事務長、職員への連絡網もあり、有事の際は施設全体で対応する体制が出来ている。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を実施している。	年2回(3月、9月)施設主催の避難訓練を毎回消防署立ち合いで行っている。火災を中心に日中想定で行っており、職員の動きもスムーズになってきている。原子力防災訓練には毎年施設から参加し、避難所の場所や施設の構造、避難内容の詳細を確認している。	夜間を想定した訓練を充実されることを期待する。
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	整備されている。	災害対策のマニュアルも完備し、備蓄として、食料品、飲料水等の準備はされている。また法人内との連携もあり、後方支援も確保されている。	

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩と心得、訪室時のノックを励行徹底している。	常日頃から尊厳とプライバシーには気を配るよう話し合いを重ねており、今年は部屋やトイレの戸の開け閉めについて考える機会を持っている。また洗濯物など個別の物は入居者と一緒に取り扱うことや呼びかけは苗字で行うなど、「してあげている」という上からの介護にならないよう、お互いの介護を見直ししている。	
----	------	--	----------------------------	---	--

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定を優先している事はもとより、表情や仕草からもくみ取れるように努力している。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	関わり持つことから始め表情の和らぎを見極めることが大切。 希望を表出し易い雰囲気づくりも重要。		
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の思いを家族と共有し季節や気温にも配慮している。		
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の食材を取り入れてより家庭的であたたかい雰囲気づくりを心掛けている。 おはぎや、笹寿司等季節感を大切にしている。	献立はなく、いただきものなど、冷蔵庫にあるもので調理をしている。梅干しやゆかり、かんぴょう、ヨモギ茶などは入居者に教えてもらいながら一緒に作っている。また笹ずしやゆずみそ、かぶら寿司を作ったり、炊飯器で作るケーキも入居者主体で作っている。お刺身やウナギのかば焼きが提供されることもあり、入居者の食事の楽しみに繋がっている。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	三則表に、食事量、水分摂取量を記入し、体調の変化を把握し、ケアに生かしている。また、体重の増減もチェックしている。		
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科衛生士の資格を有する職員がおり、特変ある方は、受診にも繋げている。「体の健康はお口から」と啓発している。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、適切な排泄用品の選定や、立位の確保の為にハビリ運動をお手伝いするなどして、できるだけトイレで排泄して頂くよう支援している。	それぞれの排泄パターンを把握し、必要時には誘導もしている。日中はそれぞれの身体能力に合わせて、自然な姿勢で排泄ができるよう支援している。夜間に関しては入眠を妨げないよう、希望があればトイレへ誘導するなどの支援を行っている。		
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食材や水分量、適度な運動、腹部マッサージなど取り入れ、看護師、薬剤師、かかりつけ医と情報共有しながら、整えるように支援している。			
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日は決めているが、その日の体調や気分によって、代替えが出来るようにしている。季節の薬草湯も楽しんでいる。	併設のケアホームとの連携もあり、日曜日以外は入浴できる仕組みが整えられている。ヨモギ湯や柚子湯、ハーブ湯など、お風呂を楽しむ機会を設けている。ボディソープやナイロンタオルは使わず、自然で肌へのダメージが少ないものを提供している。		
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の安眠は、認知症の方にとって重要と考え、個々の睡眠パターンの把握に努め支援している。			
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	かかりつけ薬局の管理の下、利用者様には薬剤管理の契約をして頂き、職員は服薬マニュアルに沿って服薬介助を行っている。担当薬剤師より3回/月助言や指導を受けている。症状の変化には、チームで情報を共有し早期の対応に努めている。			
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	得意・不得意や好む・好まない事柄を把握しサービスに繋げている。個々がそれぞれに決定する事が出来るよう心掛けている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウィルス感染拡大防止を最優先にしている為、施設の駐車場の散歩や、下車をしない近隣のドライブ程度に限っている。	今年度は、コロナの為、散歩や外気浴、下車しないドライブを行っている。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	契約時に、施設に金銭を持ち込まない事をお願いはしているが、自己管理で有している方がおられる。		
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍の中、例年より増えている。ほ一むに届いた手紙を、自宅の家族に届けて欲しいという依頼もあった。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清掃をきちんと行なう事はもとより、四季の変化や、時間の推移を感じられるよう配慮している。	アルコールでの消毒を一日2回、2時間おきの換気を行い、感染予防に努めている。玄関も開けっ放しにしている。エアコンを使うことによる乾燥を防ぐため加湿器を使っている。施設内の温度や明るさも職員が入居者の様子を見ながら加減している。	
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その場面に即した工夫をしている。特に外側テラスから見える夕やけが好評である。		
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	配慮している。	入居時にチェストやラック、寝具、鏡を持ち込まれる方が多い。家族には、できるだけ思い出のある使い慣れたものを持ってきてほしいと伝えている。最近では携帯電話を持って来ている方もいる。	
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の有する能力を早期に見極め、手すりの活用、履物や補助具の選定を行い、日常的なリハビリ運動を取り入れている。		